様式２

令和5年度　調布市立多摩川小学校　学校評価報告書（校長　上杉　潤）

学校の教育目標		
◎　思いやりのある子〈徳〉	○　自分の考えをもつ子〈知〉	○　体をきたえる子〈体〉
目指す学校像（ビジョン）　例）学校像，教員像，児童・生徒像		
「令和の多摩川小学校」 学校に関わるすべての人の「主体性」を育み、「自己有用感」を高める学校		

調布市立学校における共通した領域　＜短期的な経営目標＞

	1　豊かな心（徳）		2　確かな学力（知）		3　健やかな体（体）	
自己評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
	①　授業の中で、自分の考えを発表し、人の意見を聞くことができる姿勢を育てるための授業改善に取り組んだ。 授業では、自己有用感を高めるために、協働できる場面を多く設定し、お互いの考えを尊重できる授業実践を行った。	A	①　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の具現化を目指し、タブレット端末を効果的に活用した授業改善を図り、学力の向上を目指した。	B	①　「体力テスト」の結果を基に、授業や運動集会・行事を工夫して体力向上の取組を行った。投げる力を高めるために、「学級対抗ドッジボール大会」と持久力を高めるために「縄跳び旬間」を設定し、運動の日常化に取り組んだ。	B
	②　学校の決まりの見直しを行うことができなかった。次年度は、生活指導部会を中心として、児童・保護者・学校運営協議会と連携を図りながら、実態に合った決まりの見直しを行い、自分たちも考えた決まりを守ることを指導する。	C	②　読書を主体的な活動であると位置付けて児童の主体性を育むために、年 2 回の読書旬間やお話給食を実践し、日々の読書活動を充実させ、児童の読書量を伸ばそうとした。	B	②　食事に対する意識を高め健康的な生活につなげようと考え、日常の給食指導と、年 2 回の食育朝会、年 3 回のブックメニューを実施した。	B
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価
	①　「お子様は、自己有用感をもっていますか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、73%。児童の評価は 63%。いずれも目標値には達しなかった。	B	①　「お子様は、授業で学んだことを理解できていますか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、83%。児童の評価は、90%。学力向上のための取組は一定の成果を残したと考える。	B	①　「お子様は、すすんで運動をしていますか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、70%。児童の評価は、77%。目標値を下回った。運動する環境も考慮しながら、運動の日常化に取り組みたい。	B
	②　「お子様は、決まりを守って生活ができていましたか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は８４%。児童の評価は、87%。目標値に迫る結果となった。	B	③　「お子様は、すすんで読書をしましたか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、52%。児童の評価は、59%。目標値を遥かに下回った。	C	②　「お子様は、安全や健康に気を付けて生活していますか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、86%。児童の評価は、86%。目標値を達成したが、今後も安全や健康について日常的に指導、支援を継続する。	B
学校関係者評価	・話し合う場面では、相手の目を見て話す、伝わる言葉で話すなど、基本的なスキルを身につけさせることが重要である。授業や行事など指導する場面で、そのことを意識した指導を継続することを望む。 ・決まりを守ることについては、どうしてそのような決まりがあるのかも含めて指導が必要である。		・授業改善に日々力を尽くしていることは伝わった。すべての授業とは言わないが、教師が話をして終わる授業だけではなく、ライブ感の伴った授業がもっと増えていいと考える。 ・読書活動について、子どもたちは動画やゲームに目が行きがちであるが、引き続き子どもたちが本に興味を持てるように指導を継続して欲しい。		・放課後、外で遊べる場所が少なくなってきている。また、子どもたちも習い事があり、遊ぶ時間も少なくなってきている。子どもたちの健康を考えたときに、運動をすることや食事を考えることや睡眠をとる大切さなど、多面的に健康について考える場面を保護者と協力のもと取り組んで欲しい。	

学校の特色を生かした領域　＜短期的な経営目標＞

	4　特別支援教育の充実		5　保護者・地域との連携			
自己評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価		
	①　互いに認め合い学び合う心情を養うために、学年内の交流や異学年交流、通常級と特別支援学級との交流を行事や児童会活動、授業等を通じて行った。	B	①　子どもたちの健やかな成長を願い、保護者・地域と協働できるように、学校は学校便りやホームページを活用して子どもたちの様子等を保護者・地域に伝えた。	B		
	②　すべての子どもたちの支援・指導を効果的に行えるようにするために、特別支援コーディネーターを中心として組織的な対応を図った。 児童の居場所として、「たまごわの部屋」を設置し、活用した。	B	②　学校運営協議会（CS 協議会）の次年度設立に向けて、学校評議委員会及び学校関係者評価委員と連携を図り、準備を行った。	D		
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価		

	①　「互いに認め合うために、学校は、たまがわ若木学級との交流を適切に行っていますか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、73%。児童の評価は、38%。ただし、低学年児童の評価は、70%。交流等は積極的に行ったが、目標数値は大きく下回った。交流する意義について、広く伝えていく必要を感じた。	B	①　「学校は、適切に情報の発信をしていましたか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、78%。目標の数値を下回った。ホームページは定期的に更新し、学校お状況をお伝えしてきたが、今まで以上にホームページの宣伝と、内容の充実を図りたい。さらに、学校公開など広く学校を公開し、多摩川小学校について知っていただく策を検討する。	B		
	②　「学校は、お子様に適切な支援ができていますか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、78%。児童の評価は、73%。低学年児童の評価は、91%。目標数値を下回った。児童や保護者が何を望んでいるのかをもう一度確認し、指導や支援の在り方について、全教職員で確認をする。	B	②　「学校運営協議会についてご存じですか」の問いに対して、保護者の肯定的評価は、17%。情宣が不十分であった。来年度設置に向けて、活動の充実と知っていただくための方法を検討する。	D		
学校関係者評価	・行事や授業などで交流する機会は多く設定されているようですが、交流する目的を子どもたちに明確に示すことも大切であるので、実践して欲しい。 ・様々な支援が考えられます。実態を正確に把握し、迅速な対応を望む。		・学校が伝えたい情報と、保護者が望んでいる情報に食い違いはないか。どちらか一方に偏ってしまうと情報の共有にはならない。 ・地域行事を通じて、そこに参加する子どもたちの様子や日常の子どもたちの様子を学校や保護者、地域が共有できると良い。			

人材育成・組織運営	
自己評価	○　公務分掌を細分化し、それぞれの立場で学校運営に携わり、学校運営を行ってきた。1 年目にしては、それぞれの部の主体性が芽生え、新しい起案や児童に寄り添った教育・支援が行えた。 ○　組織的な対応については、情報共有が十分になされなかったこともあり、どのようなかかわりをしてよいのか戸惑う場面も見受けられた。 ○　新規教員や経験の浅い教員に対する組織的かつ計画的な指導・育成については、引き続きの課題である。 ○　教職員相互の研さんを積めるように、研究推進部会を中心に行った研究は、教員の授業改善に役立った。
学校関係者評価	・引き続き人材育成を行うべきである。 ・教員や保護者の働き方を考えた時に、個人面談や保護者会などオンラインで行うなどの工夫も検討して欲しい。 ・研究についても保護者や地域に伝え、学校はどこに力を入れて取り組んでいるのかを示すことにより、理解や協力を得られるようにして欲しい。

中期的な経営目標の達成状況
1　自分と他者を価値ある存在として尊重できるようになるために、自己有用感を高める教育を推進する。 ⇒言葉や態度で他者に素直な気持ちを伝えられないことがある。今後は、計画的・意図的に授業や行事を通じて、学年・異学年の交流を活発にし、言葉の伝え方等についても支援・指導を行う。 2　授業改善プランに基づき、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業を実践し、子どもたちの学力の向上に取り組む。 ⇒教員一人一人の努力により、学力向上のための授業改善を行い、一斉の成果を上げることができた。今後も、学力向上の取組を継続させる。 3　自分の課題を明確にし、健康と安全を意識した生活を送ることができるように指導・支援する。 ⇒運動の日常化については、まだ不十分である。今後、授業や行事・外遊びの奨励等、運動ができる環境も改善しながら健康と安全を意識した生活改善に取り組む。 4　特別支援教育を推進し、すべての児童の自己実現に向けた教育を推進する。 ⇒授業や行事を中心として、「自分がどうしたいか」という意識をもてるような支援を行っていく。そのためには、経験や知識が必要になることもあるため、教員は適切な準備と選択肢を与えられるようにする。 5　保護者・地域と協働し、子どもたちの健やかな成長を支え、郷土を愛する心を育む。 ⇒学校からの情報発信について、方法や内容を吟味し、共同できる体制づくりに取り組んでいく。学校運営協議会が設置されることも含め、今まで以上の協働体制を築く。
次年度の重点課題
・授業や行事など学校生活全体の中で、誰もが思いやりをもてるように指導を継続する。 ・視点を明確に定め、授業改善に取り組む。 ・健康と安全については、多面的な視野をもって、計画的に指導や支援を行う。 ・すべての児童の自己実現に向けた教育を推進する。 ・学校と保護者、地域の協働による子どもを中心に据えた教育活動を展開する。